

HOPE *Bourgogne*

アンジ・ル・デュック教会

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」(勤草書房)、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」「経験と超越」
「ヨーロッパとは何か」(小沢書店)、他多数。



クリュニー会とシトー会という、中世で汎ヨーロッパ的に広がった修道会をもつブルゴーニュには、他の地方に較べて多い数百という教会がある。それだけに、ゆるやかな丘の間に点在する村々を巡り、気の向くままにそうした教会や修道会をたずねて歩くのは、愉しみもひとしほである。

たとえば、アンジ・ル・デュックという教会はブルゴーニュのもっとも南西にある。この地方の中心であるディジョンからはおよそ188キロと遠隔の地で、オーヴェルニュと境を接している。ボヌ、オータンからパレ・ル・モニアルを経て3時間あまり、寒村というほかはないところにある。

私が行ったのは早春の頃であった。平地の運河に面した壮大なクリュニー系のパレ・ル・モニアル修道会に較べると実につつましい。そこから30キロ、いくつもの丘を越えてゆく。車の音で出てくる村人たちは、見られない私におどろき、犬も吠えてくる。丘の間にアルコンス河が流れ、ポプラの木立を映している。未だ芽を吹き出していない木々と丘の稜線の美しい影のなかに八角形の塔がそびえている。私は教会前へ出て並木の径を入口へと歩いて行った。オータンのサン・マルタン修道院附属の小修道院として建てられたのが9世紀のおわりである。その設立者はボフチエの聖職者、ユークで完徳の人として亡くなったが、彼はクリュニー会の設立者、ベルノンの友人であった。そのため、このアンジ・ル・デュックへも巡礼がすすめられたのである。内陣の設立は1001年に行なわれた聖遺骨の移管にともなったものという。

教会は5つの梁間を持ち、身廊は11世紀の中頃に建てられた。それはブルゴーニュではじめての交叉穹隆としてまとまった形をもつもので、この地方のロマネスク建築の師たちは、クリュニー修道院の交叉穹隆よりも、このアンジ・ル・デュックをしばしばその範としたのであった。

また八角形の塔と身廊は後に建てられたヴェズレーのサント・マドレーヌ教会の「モデル」となったと言われる。全体の印象はすこぶる調和のとれた形であり、気品にみちたものである。サント・マドレーヌ教会は1120年から1140年にかけて身廊をつくっている。したがってアンジ・ル・デュックの方が先行し、いくつかの建築上の示唆を後者に与えたことは間違いなく、ブルゴーニュのなかで南北に遥か隔てられているとはいえ、設立にかかわる人間関係と職人組合のつながりがこのような類似をうんだことも納得できるであろう。

私はこうしたブルゴーニュの寒村に、見事な均衡をもった教会があることに驚いた。身廊の仄暗い空間に入ってゆき、目が馴れてくるにしたがって、やや褐色の柱頭彫刻もうかび上がってくる。関心を惹いたのは、中世の曲芸師の宙返りの像である。教会が「聖なる空間」であるとともに、世俗を迎え入れ、時にその玄関を含む空間で「神秘劇」や「殉難劇」を行ない、素人の役者に加えて吟

遊詩人や曲芸師などがそれに参加したことを思えば不思議ではない。なめらかで、しなやかな肢体はリアリステックであり、他の幻想動物とともに、ブルゴーニュ芸術の水準の高さを思わせる。オータンやヴェズレーの柱頭彫刻は、その精妙さにおいて他の地域を格段に引き離している。壁画は大部分が聖ユークの業績を描いたものであるが、古い時代のため、識別がかなり難しい。

ふたたび外に出て半円型壁画を眺める。左に「東方の三博士の礼拝」、右に「原罪」、楕石には「最後の審判」で選ばれし人と地獄におちた人が分けられている。12世紀の黙示録時代を典型として示す彫刻であった。

私は一旦、村を出て、斜面を草原の方に下りて行った。夕焼が迫って空が淡くかがやいている。空気は冷たいが、どこか春の予感がみちている。振り返って教会を遠くから見上げると影絵のように稜線に木立とともに並んでいる空を背景に目にしみるような美しさだった。こんな村にしばらく止まりたいという望みが私の心をよぎった。

ところでパレ・ル・モニアル修道院教会に寄った時、私は南扉口に足をとどめた。民族的な組紐文様とも編文様ともとれる彫刻があり、しかも楕石の植物文様のうえに円形のメダル状の彫刻が8個平行し、その中心に舌を出した人間の顔と、左右に獅子文様があつた。当時、洗練されたクリュニー系の教会にしては民俗的というより土俗的である。獅子文様は聖なる場所を守る獣の意味であろう。舌を出した像もプロヴァンス地方のモンマジュール修道院回廊にある。それはなにか呪術的な禁忌を示すものであろうか。舌は多義的な意味をもち、祭儀、言語にかかわるのであろう。中世の象徴体系はなかなか解き難い。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。ルネサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合わせ下さい。

問い合わせ先: ㈱佐多商会 ブルゴーニュ事業部
TEL: 03-3586-8873 (東横ビル内) 担当: 岩 沢

